

月例研究会（2009年3月25日）

## 研究者生活43年を振り返って

——公務労働研究と私

早川 征一郎

### 本報告のもう一つの意味

3月の月例研究会報告は上記のテーマで行われたが、この月例研究会は同時に、当日夜の早川征一郎・定年退職歓送会の前の「記念講演」でもあった。学部でいえば、最終講義にあたるが、大原社会問題研究所には最終講義というものはないので、研究所の研究員らと相談の結果、「記念講演」と名付けて行うこととした。

### 報告の柱

報告内容は、次の3つの柱から成っていた。

- 1 私にとっての第1の人生＝研究者生活前史の重要性（1957年4月～1966年3月）
- 2 私にとっての第2の人生＝研究者生活43年（1966年4月～2009年3月）
  - (1) 東大大学院生の2年間（1966年4月～1968年3月）
  - (2) 東大社会科学研究所助手としての4年間（1968年4月～1972年3月）
  - (3) 法政大学大原社会問題研究所専任研究員としての37年間（1972年4月～2009年3月）
- 3 私にとっての第3の人生（2009年4月～？）

つまり、研究回顧というよりは、これまでの研究者生活（前史を含む）を中心とした自分史の一部を語るといった内容となった。以下、紙

数の関係で、それぞれの骨子のみを述べるに留める。

### それぞれの骨子

最初の1では、高校卒業後、いったん就職し、やがて法政大学経済学部に入學し、研究者を志向するに至った経過を述べた。

2(1)(2)では、そのうえで、東大大学院経済学研究科修士課程入学と修了（2年間）、東大社会科学研究所研究助手（4年間）の6年間の研究活動について述べた。

2(3)は、研究者生活として最も長く、その大半を占める法政大学大原社会問題研究所専任研究員としての37年間について、それぞれの時期の公務労働を中心とする研究の契機と研究の結果、研究活動と労働組合運動に代表される社会的活動の関係を中心に、時期を追って話を進めた。

この法政大学大原社会問題研究所専任研究員時代については、さらに1972年4月からイギリス留学までの時期、1984年4月からのイギリス留学の時期および1985年10月からの帰国後、所長就任（1999年4月～2003年3月）の時期を含め、今日に至るまでの時期に分けて述べた。

3は、そのうえで、退職後の「抱負」の一端を述べたものである。

このように書いてしまうと、ここでは紙数の関係で、肝心の研究者生活の内容まではふれることができない。その点、ご容赦をお願いし、他日を期すことにしたい。

〔付記〕なお、この月例研究会報告＝定年退職記念講演の具体的な話の内容については、本誌2009年12月号に掲載される予定である。

（はやかわ・せいいちろう 法政大学大原社会問題研究所教授）